＜同志社人が誇りに思える情報＞
同志社ファン・レポート
Doshisha fan report Doshisha fan report Doshisha fan report Doshisha fan report Doshisha fan report Doshisha fan report
発信：同志社ファンを増やす会

第３０３号　・2021 年 03 月 15 日発信

# 新著『同志社を掘る』を語る（3）

本井康博氏（同志社大学神学部・元教授）

■（300 号の）はじめに

過日、「同志社ファンを増やす会」の多田直彦氏から、「同志社ファン・レポート」が３００号を迎えるので、記念に「同志社人が誇りに思える情報」を投稿いただきたい、とのメールが届きました。そこで、新著『同志社を掘る---創立百五十年に向けて----』をご紹介することが、適切と考え、３回にわたって連載することになりました。

＊　　＊　　＊

## 【第三回・最終回】Ⅵ章～Ⅸ章

### Ⅵ章 「社会福祉･社会事業」

この章では、同志社がこの領域で先駆的な働きを担ったことを紹介、立証するのが狙いです。学部レベルにしろ大学院レベルにしろ、他大学に先駆けて、日本で初めて社会福祉コースを設置したのが同志社ですが、その要因は神学部の存在です。

最初の一歩は、神学部の内部で踏み出されました。そこから独立して文学部へと移り、今は社会学部の学科の一部になっております。本来ならば、同志社大学は日本で最初に社会福祉学部を設置してもおかしくなかったのですが、この点では他大学に遅れをとり、いまだに学科止まりであるのが私的には残念でもあります。

本書には資料を２点、収録しました。大久保利武「同志社は日本の社会事業にいかなる貢献をしたか」（原文は英文）とＳ･Ｃ･バートレット「同志社神学校の社会福祉コース」です。

大久保利武は利通の三男で、内務省監獄局長を務めるなど、官僚として社会事業・社会福

祉のエキスパートでもあります。そのため、官界において同志社の社会福祉コースの設立を最も歓迎したひとりです。同コースの後援会が発足した際、大沢徳太郎の後を受けて二代目理事長（後援会長）にも就任しています。

Ⅰ章「維新の三傑」で紹介したように、大久保利通と新島との交流は意外に薄いのですが、利通の息子たちとなると事情は一変します。その典型が利武です。外部の人間として同志社への貢献度は、抜群です。

それに対して、S・C・バートレットは、宣教師にして同志社大学教授です。彼の「同志社神学校の社会福祉コース」は、社会福祉コースが神学部から巣立ったことをいわば当事者として明確に指摘している点で、これまた貴重な資料です。

Ⅵ章では、以上の二篇の資料のほか、この領域でいわゆる「同志社派」と呼ばれる三巨頭、すなわち留岡幸助、山室軍平、石井十次を個別に取り上げました。それぞれ研究が進んでいますので、いままで究明が進んでいない面を集中的に取り上げました。

３人中、フロントランナーに当たるのが留岡幸助です。彼は家庭学校の創設者として世間的にも広く知られていますので、いわゆる「北海道バンド」の先駆者として監獄伝道（教誨師）に率先して飛び込んだ面を強調しました。

このバンドの個々の人物の列伝は、拙著『新島襄の教え子たち（ジャンル別)』の「北海道バンド」で紹介しましたので、そちらを参照してください。後に同志社総長となる牧野虎次もそのひとりです。教誨師・社会事業家であった人物が総長になるのが、同志社の特色でもあります。

２番手の山室は、一般的に日本救世軍の指導者として注目されていますので、本章では入隊するまでの宗教的な歩み、つまりは救世軍への「助走」時代に焦点を当てました。なぜならその間も、労働者伝道を目指してさまざまな教会活動に従事しているからです。それらをベースにして、最終的に救世軍人となる途を選び取るに至ります。

石井十次も同様に岡山孤児院の設立者として定評があります。同志社に学んだことは無いのですが、同志社との結びつきが濃厚なため、同志社人扱いされています。同志社を支援したミッション（アメリカン・ボード）との関係もそうです。ミッションを通した海外からの経済支援なくしては、孤児院の存続はありえませんでした。にもかかわらず、日本人サイドの支援と比べて、意外に研究が進められていませんでした。

そこで、本章では岡山で活躍したアメリカン・ボード宣教師の J・H・ペティー(J.H.Pettee)を取り上げて、石井や孤児院との関係を明らかにすることに努めました。

資料的にも未発表のミッション資料を駆使しましたので、岡山孤児院の知られざる側面に光をあてることができました。

## Ⅶ章「芸術」

ついで、芸術面で貢献した同志社の働きです。音楽、美術（絵画)、文芸の三分野を取り

上げました。

まず音楽面ですが、ごく最近、戦前の同志社に学んでプロの声楽家になった卒業生の足跡を辿る論考が発表されました。書き出しの一文は、「同志社大学は音楽学部が設置されていたわけではないが、明治時代からすでに音楽活動が盛んであった」です。またそこには、戦前の同志社を外部から見ていた人が、「その当時、同志社は京都の音楽学校などとからかはれてゐた程、音楽の盛んなところであった」と回想していることも紹介されています（仲万美子「同志社大学音楽部活動からプロの声楽家への道程---太田黒養二に焦点を当てて（１）----」三三頁、三六頁、『同志社談叢』４１，２０２１年３月）。

要するに音楽史から見ても、同志社にはさまざまな「お宝」が眠っています。なぜか。同志社は音大ではないので、特別な専門教育をするわけでもありませんが、オルガンや讃美歌、合唱、サークル（聖歌隊、合唱団）を例に挙げるだけでも、キリスト教（宣教師、信徒、教会）が日本における洋楽の開拓者になったことが窺えるはずです。

讃美歌が文部唱歌の源流になったことは、日本の音楽史ではすでに常識になっています。また、新島襄と音楽の関係は、未開拓の分野でしたが、本章ではあえてそこに切り込みました。はたして新島の音楽力はどの程度のものだったのか、です。

さらに日本政府がアメリカから呼んだ音楽指導者、L・W・メーソン（L.W.Mason）が文部省音楽取調掛（現東京芸大）で洋楽の導入と音楽教員の養成に尽力した結果、「日本音楽教育の父」と呼ばれるに至ったこともよく知られています。実は彼は、新島襄とも交流があり、アメリカン・ボード宣教師として日本に残って働くことを希望しましたが、実現しませんでした。

次に美術面ですが、これも音楽と似たようなことが言えます。美大や芸大でないにもかかわらず、学内には特色ある美術サークル（鞍馬画会）があり、卒業生の中から異色の画家も輩出しています。また、同志社が所蔵する肖像画も数多くあり、今回、その全貌をほぼ捉えることができましたので、所蔵一覧表を作成しました。

著名な肖像画をめぐる挿話も豊富です。とりわけ、周知のアーモスト大学（ジョンソン・チャペル）の新島襄肖像画には思わぬ秘話が潜みます。

神学校から始まった同志社が、以上のように音楽や美術の分野で、異彩の人材や作品を生み出すことは奇異に思われがちですが、リベラル・アーツ教育の伝統を最初から重んじたことを考慮すると、あながち「無謀な」見解ではありません。

最後に文芸部門では、徳富蘇峰・蘆花兄弟が突出していますが、ほかにも同志社に関連する文人、出版社やジャーナリストなどがいます。珍しいところでは、キリスト教との愛想が必ずしもよくない夏目漱石の周辺には、実は何人もの同志社出身者、それも信徒がいたことを発掘いたしました。

漱石は意外にも同志社人脈と深い繋ながりをもっていました。この事実を知ればしるほど、漱石文学中のキリスト教的要素は、意外にも同志社から流れ出ているような気がしてなりません。この点は、漱石伝や日本文学史の側から、もっと注目されてしかるべきではない

でしょうか。

## Ⅷ章「体育・スポーツ」

次に「体育・スポーツ」は、「芸術」面と同様に、従来の同志社史では日陰におかれていましたので、今回、体育、スポーツのジャンルにも大いに切り込みました。ここでも同志社らしい貢献が見てとれます。

とりわけ、この方面の史実は、最近出版された『同志社スポーツの歩み（第三版)』(同志社スポーツユニオン、２０２０年)でも明らかにされています。とりわけ私はその第一部「同志社体育・スポーツの系譜」を単独執筆いたしました。かなりの長文ですが、それでも盛り切れなかった部分がありましたので、今回、『同志社を掘る』中に補遺としてⅧ「体育・スポーツ」を収録いたしました。

具体的に言えば、新島と体育の関連や、初期同志社がかつては体育・スポーツの先進校であったことを明らかにしました。その理由の一半は、音楽と同様にキリスト教との親和性にあります。キリスト教は体育や運動を好みます。

その典型がアーモスト大学の保健体育科の設置（全米初）と大学体育館の建設（全米初期のひとつ）です。新島はこの大学で、日本人として初めて正規の体育の授業を受けた留学生でした。そのため、彼の後輩にあたる G・A・リーランド（G.A.Leland）は、文部省から呼ばれて体操伝習所（現筑波大学）で体育の普及と体育教員の養成に当りました。その結果、「日本体育の父」と呼ばれるほどの業績を上げました。

彼が任期を終えた時、アメリカン・ボードは彼を宣教師に任命して日本の伝道や教育に従事させたいと期待しましたが、メーソンとは逆に本人から拒否されました。

同志社は、日本が最初にオリンピックに参加した時から、スポーツ重視の学校ですから、スポーツ健康科学部が（社会福祉学部と同様に）100 年前に出来ていてもおかしくないと私などは思ってしまいます。２００８年にスポーツ系の学部が初めて出来たとき、私は全国から集められたスタッフに対して、「かつて本学が体育の先進校であった当時の威光を取り戻してください」とエールを送りました。

同志社女学校のスポーツ熱も同様で、同志社がオリンピックに送りこんだ最初の女性アスリート（水泳）は女子部の生徒（横田みさを）でした。彼女については、本書で発掘しておきました。

本書発行後に分かったことですが、同志社女子部の創立者、Ａ・Ｊ・スタークウェザー（A.J.Starkwether）の母校（Hartford Female Seminary）の創立者（C.Beecher）は、全米でも有名な女性教育の先駆者ですが、とりわけ体育の面ではそうでした。同女でも開校直後から体育やテニスなどのスポーツが盛んであった一因は、おそらく彼女の感化ではないかと推測できます。

## Ⅸ章「『同志社百五十年史』に向けて」

最後は「『同志社百五十年史』に向けて」の提案です。数年後に迫った『同志社百五十年史』（仮称）の刊行に対して、私なりの想いや要望を提示しました。『同志社百年史』という大著の通史がすでに刊行されている以上、１５０年史はどうあるべきか、は大きな課題です。私的には、他大学の潮流を見ても、通史よりも部局史のほうに軸足を置くべきだろうと思います。

たとえば、大学だけを見ても、この５０年間でかつての６学部が１４学部に増殖しております。さらに大学付属の小学校が２校も新設されています。つまりは、サイズ的にも同志社大学がもうひとつ新設された感すらあります。女子大にしても、学芸学部いっぽんであった時代から見れば、今や６倍増です。こうした質的な変貌に加えて、京田辺キャンパスの開発という量的な拡大があります。

こうした拡大路線をきちんと記録するためには、各パーツの歩み、すなわち部局史が必須になります。

それ以外にも、『新島襄事典』や『同志社史事典』などの記念出版も企画に含めてもらいたいものです。前者は、この半世紀にわたる新島研究の成果を取り込むという意図もあります。新島研究の最前線を総合的に記録に留めておくには、学園創立１５０年の節目の時は最善の機会です。

後者もほぼ同様な趣旨から刊行が望まれますが、とりわけ特異な働きを残した教職員、ならびに卒業生の動向を記録として残しておくことは、大切です。２０１９年に刊行した拙著『新島襄の教え子たち』の上下巻（「ジャンル別」と「出身地別」）には、初期の関係者（新島の直弟子たち）だけでも約１８０名を取り上げております。同書の刊行には、将来の『同志社事典』の素材になれば、との想いが秘められております。

次に１５０年史に要望したいのは、同志社教会史の視点を大事にしてほしい点です。かつての同志社史には、同志社教会史の章や節があったのですが、１００年史に至って教会史は切り捨てられてしまいました。純粋な学園史に特化したと言ってもいいでしょうか。

学校法人と宗教法人は分離すべきとの主張も一応通ります。しかし、こと新島の場合は宗教家にして教育者ですから、学園と教会を車の両輪のように一体化していました。言うならば、「片手に学校、片手に教会」です。同志社教会抜きに学園の歴史は綴れないと確信しますので、なんとか同志社教会の「復権」を祈りたいです。

最後は『同志社を掘る』の「隠し味」です。本書には、この種の著作としては珍しく写真を多数、本文や中扉に掲載しました。本邦初公開クラスの歴史的に価値のあるものや新たに撮り下ろしたものなど、新旧合わせて 30 枚を散りばめました。写真をご覧いただくだけでも楽しめます。

それらは、本文の理解を助けてくれるだけでなく、同志社史の奥深さやユニークさが実感でき、読者のイメージが大きく膨らむのではないかと期待しています。

## 【おわりに】

三回にわたって拙著の新刊『同志社を掘る-創立百五十年に向けて---』を紹介することができました。私的な執筆の狙いは「謎解き」であり、公的には同志社の独自性を広く告知する点にありました。

前者では、「同志社の完成は二百年」や「ミッションは最大のサポーター」、「新島は教育者」、「学校と教会は別組織」などとされてきた通説や誤解を分析、批判することが主眼です。ほかにも「眼からウロコ」的ないくつかのサプライズを発見されると思います。

後者では、同志社や新島がキリスト教と不可分である点を、同志社最大の「売り」（独自性）として押し出しました。社会福祉は当然としても、芸術にしろ体育・スポーツにしろ、同志社にしては意外な領域での貢献も、この点を離れては考えられません。カリキュラムの面で言えば、知育・徳育・体育におよぶリベラル・アーツ教育です。IX章で、１５０年史の編集でも同志社教会史の視点を考慮してほしいと望んだのも、そのためです。

私にとっては、以上のような同志社の独自性こそ、学園の魅力の源と考えて本書を執筆いたしました。読者の方々もこの点に共鳴していただければ、本書は「同志社の魅力満載」本になるはずです。

今回は、合わせて拙著の販売 PR をもさせていただいたところ、何名もの熱心な読者から購入依頼がありました。鞍馬画会や体育会サークルの OG、OB、ハワイ寮卒寮生を始め、「青春プレイバック」を期待しての注文が目立ちました。在庫が不足しそうでしたので、出版元から取り寄せました。まだ少々、手元にありますので、引き続きご注文を受けつけることができるようになりました。

「はじめに」で書きましたように、早稲田大学での自校史「早稲田を知る」出張講義は、今年はリモートになりました。この記事の連載中に京都で録画して、送り届けました。テーマは「早稲田と同志社---歴史的連鎖の消息---」にしました。講義録は今年か来年に出版する「新島襄を語る」シリーズの続巻に収録したいと考えています。

この続巻には、本稿「新著『同志社を掘る』を語る」１～３も収録予定です。出版計画が確定すれば、また「同志社ファンレポート」で紹介させていただければ、と思っています。

ご愛読、ご注文、ありがとうございました。